

【試し読み】

新天理図書館善本叢書

第29巻 奈良絵本集 7

(2019年12月刊行・八木書店)

解題

石川透・齋藤真麻理

※本書の詳細は下記サイトをご参照ください。

<https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/511>

『奈良絵本集七』  
解題

石川 透  
齋藤 真麻理

## 熊野の本地

装訂 袋綴 二冊

表紙 金泥草花模様の打曇表紙

料紙 鳥の子紙

法量 縦三二・〇cm×横二五・五cm

外題 なし(左上に題簽剥落跡あり)

墨付 上冊十七丁、下冊二十一丁半。

行数 十二行

字高 約二七・五cm

挿絵 上冊半丁七図、見開五図。下冊半丁五図、見開九図。

極札 下冊遊紙裏に「和州十市殿遠忠 熊野、本地の物語 上壹冊(朱印「見

室」)の古筆極札を貼付する。

書写年代 「室町時代末期」写

(請求記号九一三・五一―一四五)

『熊野の本地』は、熊野権現の由来を記した物語で、熊野比丘尼のような勸進唱導の人々が語り伝えたであろうことは、本書末尾の一文「このさうしを、しんしてよめは、こんけんの、御よろこひたまひけり(略)くわんしやう申たてまつる」からも窺われる。それとともに、その空想的な面白さから、説経や古浄瑠璃などさまざまな形で享受され、御伽草子に分類されている作品だけでも、写本・版本・奈良絵本・絵巻が、それぞれ数多く残されている。松本隆信は、「序説・熊野の本地・巖島の本地」(『中世における本地物の研究』汲古書院、一九九六年)において、「諸本は、非常に数が多い上に、本文の異同が錯雑している。それらの諸本を分類し、系統づけることは大変難しい作業である」と述べ、「一応の分類」としながらも九系統に分ち、本文の比較を行いつつ諸本の特徴について詳細に記している。

中でも第一系統は更に三種類に分けられ、室町中期を下らない制作と考えられる酒井宇吉旧蔵本や、その写しとみられる天理図書館蔵元和八年写絵巻、高野辰之旧蔵書が第一系統第一種に区分されている。加えて、松本は「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』三省堂書店、一九八二年)において、ニューヨークパークコレクション所蔵本などの絵巻も同種の系統として分類している。これら室町末江戸初期に作成された第一系統第一種の絵巻群は、その数の多さと類似性から、組織的な作成が行われた可能性がある。

第二系統以下は、全体のストーリーは変わらないものの、本文的な差異が多くなる。本書は豪華な特大縦型奈良絵本として、蜷川第一蔵本と共に第五系統に分類されている。『熊野の本地』の第五系統本の内容は、以下の通りである。

(上冊)天竺摩訶陀国の王、善財王は、千人の女御と七人の后を持っていた。千人の女御の一人、五衰殿は観音の御利生により后となった。王にはそれまで子がいなかったが、五衰殿は寵愛され懐妊した。九百九十九人の后達(ママ)はこれを妬み、悪王が生まれると嘘を言つて王を脅す。

(下冊)九百九十九人の后達は、武士十五人に五衰殿を山で殺してくるように命じる。武士達は仕方なく五衰殿を連れ去り、五衰殿が王子を産んだ後に、首を切り宮殿に持ち帰る。王子は首を切られても出る五衰殿の乳を飲み、猿達に育てられた。王子は七歳の時に、伯父にあたる聖に助けられ、宮殿で父王と対面する。王子は位を譲られるが、十五歳になると、摩訶陀国は女人の恐ろしい国だとして、父、伯父と共に飛車に乗つて日本の紀の国にやってきて、熊野三所権現となった。

第五系統は、他系統と較べると、本文が短く、表現にも統一性がない、といった特徴があり、内容的にも、他系統に見られる五衰殿が生き返る場面は出てこない。

ここで、第一系統を代表する天理図書館蔵元和八年写絵巻(元和絵巻)と本文を比較してみる。元和絵巻の冒頭は、熊野権現について概説した後、天竺の

話となるが、本書には概説の部分はなく、いきなり天竺の話が始まっている。本書に続いて、同じ第五系統の蜷川本を列挙する。

#### 元和絵巻

そのいにしへを、たつねたてまつるに、ちう天ちく、まかたこくの、大わうにて、おはします、御なをは、千さいわうと、申たてまつる、御くわほう、めてたくして、きさき千人までお、もち給ふといへ共、一人も、わうし、いてきたまはねは、くらゐをゆつるへき、かたなし、なけき、かなしみ給ふ事、かきりなし（『室町時代物語大成』四による）

#### 本書

てんちくにくにあり、そのくにのわうの、御なをは、せんさいわうとそ申けり、御こゝろはへ、たくひなく、たみをあはれみ給ふ事、人のおやの、子をおもふか、ことくなり、ふくかせも、ゑたをならさす、ふるあめも、ときをかへす、あしたにまいり、ゆふへに、つかうまつる人々、一まんの大しん、二まんのくきやう、そのほか、くらんと、たきくち、以上、十まんよにんなり、せんにんのようにこ、七人のきさきを、もちたまへり

#### 蜷川本

てんちくにくにあり、そのくにのわうの御なをは、せむさひわうとそ申ける、御こゝろはへたくひなく、たみをあわれみ給ふ事、人のをやのこをもふかことくなり、ふくかせもゑたをならさす、ふるあめもときをかへす、あしたにまいり、ゆふへにつかふまつる人々、いちまのたいしむ、二幡のくきやう、その外くらんと・たきくち、以上十万余人なり、千にんのこようこ、七人のきさきをもち給ふ（『室町時代物語集』一による）

以上のように、第一系統の元和絵巻と第五系統の本書とでは、本文にかなりの差があることが分かる。一方、本書と蜷川本はほぼ同じ本文で、その違いは

ごくわずかである。

『熊野の本地』にあつては、諸本の多さやさまざまな系統が存在していることから、これまでに数多の論文が記されてきた。なかでも諸本研究のみならず、内容についても言及してきたのは、松本隆信である。松本の研究の中心は、本地物であつたために、『熊野の本地』についても多くの論考がある。仏教用語としての「本地」となると、その解釈は難しくなるが、物語世界で言う「本地」は、その由来や成り立ちを記した物語のことである。日本各地の著名な寺院について、本格的な神仏の話ではなく、わかりやすい人間世界の話として制作されたのが、いわゆる本地物である。

鎌倉時代末期に真名文で記された『神道集』には、既に物語的な本地物が存在し、『熊野の本地』の原型とされる「熊野権現事」もその中に収められている。ただし、『神道集』には絵巻物は存在せず、『熊野の本地』がいつから平仮名化され、絵を伴うようになったかは確定はできない。

これまでの研究では、『熊野の本地』は、『仏説施陀越国王経』等の經典の記述を元にして成立したと考えられている。その具体的な成立論を展開したのは牧野和夫「熊野本地譚の側面」（『中世文学』二五、一九八〇年）等であつた。いわゆる内容の成立が論じられることが多くなつた一方で、絵入りの『熊野の本地』について触れる論考も多くなつてきた。

絵入り本については、論考だけではなく、一冊の単行本として、『熊野の本地』を全文カラー写真入りで紹介する本も現れた。九州大学国語学国文学研究所編『松濤文庫本 熊野の本地』（勉誠社、一九九七年）や『和歌山県立博物館所蔵熊野権現縁起絵巻』（勉誠出版、一九九九年）等である。それぞれ室町末江戸初期写と思われる善本であり、解題も充実しているが、絵画部分についてはまだまだ研究の余地がある。これは、全ての御伽草子作品に関して言えることであるが、作品の本文研究はかなり進んできたものの、絵画についての研究歴が浅く、どうしても論じる人物の視点のみになりがちなのである。ただし、この問題も絵画の研究を積み重ねることによって、更に進展してゆくことであろう。

かつて、横山重は、『室町時代物語集』一（大岡山書店、一九三七年）の『熊野

の本地』の解題において、挿図に狼ではなく大亀を描いている作品があることから、本文が「おほかめ」とある伝本が存在した可能性を指摘している。本文と絵画との関係を考察する上では、このような事例は非常に重要で、諸本全てにおいて詳細な調査を行うことは、きわめて有意義なことである。本文のみならず、絵画部分も全てに個性がある作品群が存在していることから、このような地道な調査研究が重要であると考えている。

なお、本書の下冊の遊紙の裏には、「和州十市殿遠忠 熊野、本地の物語 上壹冊」と記した極札があるが、残念ながら、今日十市遠忠筆とする短冊類とは筆跡が異なる。時代的にも数十年の隔たりがあるようである。

また、本書は、天理図書館蔵『いはや』『しづか』『花鳥風月物語』等と共に、豊臣秀頼伝来とする報告がある（『天理図書館善本叢書』月報三三三）。本書を始めとする豪華奈良絵本は、まさに為政者が所持するにふさわしい作品であると言えよう。

（石川透）

## 宝月童子

装訂 袋綴 二冊

表紙 紺紙金泥表紙。柳、反橋、四手網、水草等を金泥で描く。見返しは布目地金紙。

料紙 鳥の子紙

法量 縦二九・八cm×横二一・五cm

外題 中央丹紙金泥下絵題簽に「およふのあま 上(下)」と墨書。

墨付 上冊二十丁半、下冊二十六丁。

行数 十行

字高 二四・〇cm

挿絵 上冊半丁十図、下冊半丁十一図。

印記 「月明莊」

書写年代 〔江戸時代前期〕写

備考 折紙に「およふのあま折紙極／およふのあま二冊／繪狩野蛇足軒山雪／

詞書並外題八条殿／知仁親王筆各真蹟／最無疑候也／明治<sup>古筆</sup>辛亥仲春 正七位

湯浅了雅(印)と墨書。寸法、縦二一・八cm×横五六・七cm。「折紙」と墨書

した和紙に包む。

(請求記号九一三・五一三三七三)

室町物語。題簽に「およふのあま」とあるが、老法師の破戒滑稽譚として知られる同名の室町物語とは別作品である。本書冒頭は「むかし、中天ちく、まかだこくのみやこに、およふのあまとて、一人の長じや、おはします」(句点は『室町時代物語大成』による)と始まり、主人公である宝月童子の父の名を「およふのあま」とするが、以後、作中にこの人名は登場せず、一貫して「まなくわつ長者」と記される。以下、物語の梗概を示す。

(上冊) 中天竺まかだ国のおよふのあま(満月長者)は花玉婦人と幸せに暮らしていたが、唯一、子宝に恵まれないことを嘆いていた。夫妻は観音に祈りを込め、九月十三夜、天稚御子もかくやと思われるほどの美しい若君が誕生した。子どもは宝月童子と名付けられ、大切に育てられたが、常に病がちであった。満月長者は家来の進言を容れ、北天竺のしんりう山にある不老不死の木「ちんなき」の実を取りに行くことにした。長者一行は三年三月の旅の末、北天竺に到着するが、財宝に目がくらんだ大王によって「しやらばらさう」という草を食べさせられ、馬に変えられてしまう。

(下冊) 大王は臣下の「かうひらん」に命じて長者の屋敷に夜討ちをかけたが、火を放ったため、すべては灰燼に帰した。花玉婦人と宝月童子は家来の「あんならえん」に救い出されて身を潜め、極貧の日々に耐えた。やがて十三歳となった童子は、「あんならえん」を伴い、父を探して北天竺へと出立した。途中、童子は「かうひらん」に出会って顛末を知り、「しやらばらさう」の葉を手に入れて長者一行を救出、北天竺の大王を討伐し、まかだ国に帰還した。一件は叢聞に達し、宝月童子は皇太子に迎えられ、満月長者と花玉婦人は北天竺の大王と后に、「あんならえん」は左大臣となり、めでたく富み栄えたという。

本書は夙に天下の孤本として知られ、今西實氏によって学界に紹介された<sup>(1)</sup>。同氏は、豪華な装訂から本書が嫁入本であったであろうことを述べている。また、題簽をめぐっては、本書の基づいた原本に不明確な箇所があったために長者名が「およふのあま」となった可能性や、原本がすでに題簽を誤貼して「およふのあま」とした可能性に触れつつ、『およふのあま』が本書成立に先行することを指摘している。同氏によれば、満月長者を馬に変えた「しやらばらさう」は『出曜経』巻第十五・利養品下に所見の靈草であった。この草の名は『節用集』等にも見え、類話は『今昔物語集』巻三十一第十四、『宝物集』巻第一、狂言「人馬」や民間伝承等々としても流布浸透している<sup>(2)</sup>。なお、かつて、題簽を単なる張り間違いと見る説が出されたこともある<sup>(3)</sup>。



しかし、近年、石川透氏により、『宝月童子』の一本が発見された<sup>(4)</sup>。石川本は下巻のみ存、詞書は天理本と同筆である。表紙は紺紙金泥表紙、寸法、縦三〇・一 cm×横二一・七 cm。表紙中央に、金泥で下絵を施した朱の原題簽を貼付、「およびのあま 下」と墨書がある。題簽寸法、一三・五 cm×三・五 cm（天理本一六・四 cm×三・五 cm）。字高、一四・〇 cm。挿絵はすべて切り取られているが、見開き二図を含む十三図分の白紙を有し、これと重なっていた料紙には、天理本と同じく薄青に金切箔を用いた霞の一部が残る。総じて、石川本の書誌事項は天理本と極めて近く、同一工房で制作された可能性が高い。詞書についても、両本が途中から北天竺の臣下「かうひらん」の名を「かうひら」と記すなど、ほぼ同文といつてよいほど近いが、字母や漢字表記の使用箇所、濁点などには違いが認められ、比較的大きな差異として以下が挙げられる。

- ① 天理本一四九頁一行目「くはぎよくぶにん」  
石川本「くわきよくふしん」
- ② 天理本一五一頁三行目「おりふしせいとうなかりけり」  
石川本「おりふしせいこそなかりけれ」
- ③ 天理本一六四頁二・四行目「そぶはほつこくに」「ここの一あし」  
石川本「そぶは胡国に」「ここの一足」
- ④ 天理本一六五頁九行目「ふかぎうみ」  
石川本「ふかきうみ」
- ⑤ 天理本一八〇頁三・一〇行目「きんちうの御むまや」「七十五日と」  
石川本「きんちうのみまや」「七十五日と」
- ⑥ 天理本一八四頁二行目「いかにもしてようしたて」  
石川本「いかにもしてようしたて」

とりわけ注目されるのは⑥の石川本の異本注記であり、少なくとももう一本の『宝月童子』が存在していた可能性が考えられよう。なお、挿絵の入る箇所は両者ともほぼ一致するが、天理本下巻第五図（一二二頁、『室町時代物語大成』

第一五図）に続き、「かうひらん」が満月長者の馬となった経緯を語る二箇所（天理本一七九頁四行目「いかやうのたが」、同一八〇頁五行目「ねんごろにこそはかたりけれ」）に、石川本は挿絵二図（うち見開き一図）を切り取った痕跡を有する。一方、天理本下巻第六図（一八二頁）は物語展開より後ろに位置しており、本来は童子達が野原で「かうひらん」に出会う場面に入るべきである。第八図（一九二頁）を一八二頁へ、第九図（一九五頁）を一九二頁へというように、順に掲出箇所を繰り上げると物語の流れに沿う。大団円の図は上巻第一図（一〇三頁）であった可能性も考えられ、挿絵の入る位置と枚数が若干異なっていたと推測される。本作ははまだ伝本僅少であるが、天理本と装訂や筆跡等を同じくする大型奈良絵本に国文学研究資料館蔵の『しつか』（二冊、<https://doi.org/10.20730/200003085>）、『からごと』（二冊、<https://doi.org/10.20730/200003067>）がある。とくに前者の前表紙は、かなり傷みはあるものの、天理本『宝月童子』とほぼ同じ位置に酷似する反橋などを描いていることが確認できる。

『宝月童子』は物語末尾を「たゞ人は、きみには、ちうをつくし、おやには、かうをなし、をとをあはれみ、ふうふの中をやはらげ、子をいとをしく、せんものは、すゑたのもしく、さかゆべし、めでたかるべき、事ども也」と締め括っている。本書の読者として女性、それも、大名高家への出仕や、そうした階層に近い女性が想定されているといえよう。「た、とにかくに しょうのみ たいせつたいしと こゝろへて」「おやおと、いにも かうありて」（慶長十年写『宗祇短歌』。古典文庫所収）と女訓を謳う当代性とも通じている。

本作をめぐることは、先述「おようのあま」という作品名の問題をはじめ、主人公の命名由来などについても、なお考究を進める必要がある。たとえば、満月や宝月童子の名は確かに仏典に散見するものではあるが、<sup>(6)</sup>一方で父の名が満月長者であり、童子が九月十三夜に誕生したという結構からは、古来、詩歌管弦を伴った観月の遊びが連想されるのではなからうか。八月十五夜の望月の賞美は中国に始まり、九月十三夜の観月は日本に始まったとされ、十一世紀には十三夜詠が盛行するようになる。<sup>(7)</sup>『徒然草』二三九段には「八月十五日、九月十三日は、婁宿なり。此宿清明なるゆへに、月を翫ぶに良夜とす」（新日本古典文

学大系」とあり、また、『宝月童子』とはほぼ同時代の例から一端を挙げれば、「後の名月 ませ名月<sup>俳</sup> 栗名月<sup>同</sup> ふた夜の月 月の名残 みな十三夜の事なり」(『増山井』九月)、「絵にもやはおもしろいをばのちの月(重定)」(『新統犬筑波集』十八・秋発句下)などに見える。『新明題和歌集』巻第三秋にも「あかざりし最中の秋のなごりをや猶長月のこよひみすらん」の詠が載るように、八月十五夜の満月、九月十三夜の月は両者併せて楽しまれたのであり、後者はとくに「後の月見」とも称された(『焦尾琴』雅・名月之篇「十三夜」)。『日次紀事』は八月十五日の観月を「御遊」(公事「今夜 禁裏 院中被<sup>レ</sup>賞<sup>セ</sup>明月<sup>ヲ</sup>多<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>詩歌管弦<sup>ヲ</sup>之御遊<sup>ニ</sup>)、九月十三日のそれを「名月」(節序「今夜、月倭俗<sup>ニ</sup>謂<sup>フ</sup>豆名月<sup>ト</sup>」禁裏多<sup>ク</sup>有<sup>リ</sup>倭歌<sup>御会<sup>ニ</sup></sup>)の名でそれぞれ立項している。

このように『宝月童子』という室町物語は、不可思議な靈草と馬人の奇譚、仏典の撰取、命名由来など、内外和漢の説話要素に満ち、享受層のすがたをも垣間見せる作品であり、奈良絵本生成の具体相を明らかにする好資料といえよう。

(齋藤真麻理)

#### 【注】

- (1) 今西實「奈良絵本『宝月童子』とその説話」(『ピブリア』二二、一九六二年三月)。同氏により、折紙の記事の信頼性に疑問が呈されている。本文は『室町時代物語大成』一二(角川書店、一九八四年)に収載。また、開館八十六周年記念展「御伽草子〜奈良絵本・絵巻を中心に〜」(天理図書館、二〇一六年)など参照。
- (2) 田口和夫「共謀する下人―「人馬」の形成と説話」(『狂言論考―説話からの形成とその展開』三弥井書店、一九七七年)。
- (3) 徳江元正「国内の主なコレクションめぐり」(『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年)。
- (4) 石川透『入門奈良絵本・絵巻』(思文閣出版、二〇一〇年)。
- (5) 恋田知子「『しづか』解題」(『奈良絵本集』六、八木書店、二〇一九年)。
- (6) 『大乘宝月童子問法経』『十住毘婆沙論』巻第五・易行品第九ほか。

- (7) 本間洋一「九月十三夜の月―その詩歌の素材としての定着と表現をめぐって」(『秋桜』七、一九九〇年三月)、瓦井裕子「九月十三夜詠の誕生―端緒としての『源氏物語』撰取」(『国語国文』八五―七、二〇一六年七月)など参照。

#### 【附記】

貴重なお蔵本の閲覧をご許可下さった石川透先生に、心より御礼申し上げます。